

O1-014

ダウン症候群の粗大運動発達の獲得時期と知的水準に関する調査研究

伊東 祐恵¹、今井 美保¹、星山 麻木²¹横浜市西部地域療育センター²明星大学教育学部

【目的】

ダウン症候群（以下、DS）は染色体異常の中でも頻度が高く、成長曲線や粗大運動発達の獲得時期、知的水準（以下、IQ）の平均値や基準が示されており、定型発達と比較しておくことが多い。粗大運動発達のおくれの背景には、低緊張など身体面の問題が想定されている。一方、定型発達においては一般的に、知的障害が重いほど粗大運動発達もおけるとされる。しかしながら、DSにおける粗大運動発達とIQの関係についての報告は少ない。本研究では、DSにおける粗大運動発達とIQの関係を明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象は、2016年8月までにA療育センターの小児科を受診した2004年4月2日から2014年4月1日に出生した10学年のDS児79名（男44名、女35名）とした。方法は、診療録より、(1)粗大運動発達（定頸・寝返り・座位・ずり這い・手膝這い・つかまり立ち・伝い歩き・1人立ち・歩行）の獲得時期、(2)IQあるいはDQについて後方視的に調査を行った。また、(3)粗大運動発達とIQについてPearsonの積立相関係数にて関係性を求めた。粗大運動の獲得時期は、在胎週数が37週未満児は修正月齢を用いた。また、対象の殆どが乳児期から理学療法を実施していた。倫理的配慮は、横浜市リハビリテーション事業団研究倫理委員会に承認されている。

【結果】

(1) 平均獲得時期は、定頸は 5.8 ± 2.3 ヶ月、寝返りは 6.1 ± 2.4 ヶ月、座位は 14.1 ± 4.1 ヶ月、ずり這いは 12.8 ± 3.2 ヶ月、手膝這いは 19.3 ± 7.2 ヶ月、つかまり立ちは 19.4 ± 7.7 ヶ月、伝い歩きは 21.6 ± 7.9 ヶ月、ひとり立ちは 25.9 ± 10.9 ヶ月、歩行は 28.6 ± 11 ヶ月であった。(2) 平均IQは 47.3 ± 10.6 であった。(3) 粗大運動発達とIQの関連については、定頸 -0.369 (.003)、座位 -0.539 (.000)、手膝這い -0.583 (.000)、歩行 -0.668 (.001)に1%水準で有意差がみられた。

【考察】

粗大運動発達の平均獲得時期は、これまで報告されているDSの基準と同様であった。次に、粗大運動発達とIQの関係は、IQが高いほど定頸・座位・手膝這い・歩行の獲得時期が早いことが示され、定型発達と同様の関係にあった。このことから、粗大運動発達を促すにあたり、低緊張など身体面の状況に加えて精神面の発達状況も考慮した関わりが必要と考える。